



オキナワハクセンシオマネキ



大きなハサミを振るオキナワハクセンシオマネキのオス

シオマネキの名前の由来

干潟の少し泥の混ざる砂地（泥干潟）にいるカニの仲間で、泥干潟に巣穴を掘って生息している。巣穴は、通常満潮線（最後まで潮のこない所）付近で多くみられる。シオマネキの仲間の大きな特徴は、メスのハサミは左右とも小さいが、オスの片方のハサミが大きいことで、個体によって「利き腕」が違い、右のハサミが大きな個体もいれば左のハサミが大きな個体もいる。オスのもう一方のハサミとメスの両方のハサミは小さく、砂泥をすくうのに都合がいい構造をしており、砂泥をつまんで口に入れ、砂泥中に含まれるプランクトンなどをろ過して食べている。そのため、シオマネキも干潟の浄化作用に貢献している生物の一つである。

潮が引いた泥干潟では、オスたちが盛んに大きなハサミを振り、メスの気を引く「ウェービング（waving）と呼ばれる求愛行動」が見られる。和名の「シオマネキ」は、この動作が「潮が早く満ちてくるようにまねいている」ように見えるためについた名前である。また、英名では“Fiddler crab”と呼ばれ、この“Fiddler”はヴァイオリン奏者のことで、やはりこれも「ウェービング」の様子を表した名前である。

泡瀬干潟の泥干潟では、オキナワハクセンシオマネキ以外にも、シオマネキ、ベニシオマネキ、ヤエヤマシオマネキ、ルリマダラシオマネキ、ヒメシオマネキがすんでいます。

ちなみに、写真のオキナワハクセンシオマネキの「ハクセン」は、集団で白く大きなハサミを振る様子が、白い扇子（せんす）を振っている様に見えることからハクセン（白扇）シオマネキと呼ばれている。他にもベニシオマネキやルリマダラシオマネキも、オキナワハクセンシオマネキと同様に、体色の特徴からついた名前である。このように、形態や体の色からついた名前をもつ生き物は多くおり、その生き物の名前の由来を考えてみるのも楽しいことである。